

橋の遺伝子 ③



「PC橋」の先駆けとなった第一大戸川橋梁(信楽高原鉄道提供)

滋賀県甲賀市の信楽高原鉄道に架かる第一大戸川橋梁(きよつりよう)は昨年、国の有形文化財に登録された。引張った鉄筋を内部に入れて強度を増す「プレストレストコンクリート(PC)」を初めて採用。道路や新幹線などでPC橋が普及するきっかけになった。

「こんな地味なのに」。大戸川橋梁を設計した元国鉄総裁の仁杉巖さん(94)は感慨深げだ。見た目は普通のコンクリート橋。完成から55年とあまり古くなく、土木学会の「選奨土木遺産」にも入っていない。橋の歴史的价值を訴えてきたのは「産業考古学」の学者たち。中でも仁杉さんが感謝するのが、神戸大学助教の神吉和夫さん(61)だ。2000年、滋賀県が近代化遺産を選ぶにあたり、神吉さんは大戸川橋梁を調査した。学生時代に授業で

滋賀・第一大戸川橋梁のPC橋 今は新幹線・道路に普及

学んでおり「これが実物か」と思った程度だったが、調査中に線路脇に長さ2倍ほどの橋げたが置いてあるのを見て考えが変わった。仁杉さんに聞くと、経年劣化を追跡するために残したもので、国鉄時代はほぼ30年にわたって測定していた。将来の研究に役立てようとする仁杉さんの姿勢に感激し、滋賀県の担当者に近代化遺産に加えるよう推薦した。

元京都大学助教授の城下莊平さん(65)も調査結果を学芸会などで発表、歴史的価値を認知させることに努めた一人だ。仁杉さんが土木学会誌に通常の5倍近い56ヶにわたって詳細に内容を記していたことに感心。「産業を支えた遺産は重要だ」

大戸川橋梁は今も、強度や耐久性に問題はなく、1日15往復前後の列車が通過している。文化財登録後、橋を見に来る客が増えたという。